

平成25年度資源評価票(ダイジェスト版)

イカナゴ類

イカナゴ *Ammodytes personatus*

キタイカナゴ *A. hexapterus*

系群名 宗谷海峡

担当水研 北海道区水産研究所

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成25年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)



生物学的特性

寿命: 6歳以上

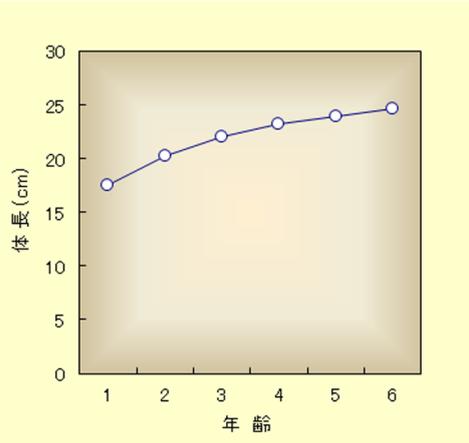
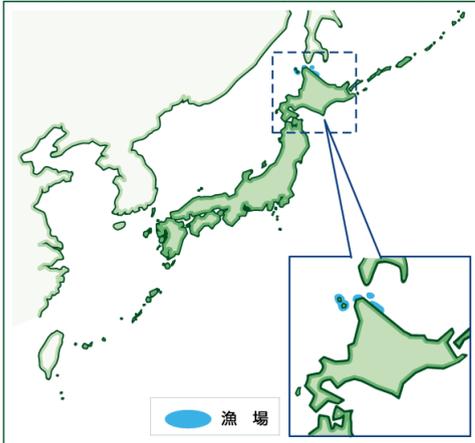
成熟開始年齢: 3歳

産卵期・産卵場: イカナゴは春季(3月下旬~5月上旬)、稚内、枝幸および利尻・礼文周辺の沿岸域、キタイカナゴは初冬(11月下旬~12月)、サハリン周辺の沿岸域

索餌期・索餌場: 主に宗谷海峡周辺の水深40~80mで、底質が砂礫の海域

食性: 未成魚はカイアシ類などの浮遊性甲殻類や珪藻類、成魚はカイアシ類、端脚類、オキアミ類、十脚類、ヤムシ類、魚類

捕食者: 魚類、海獣類のトドなど

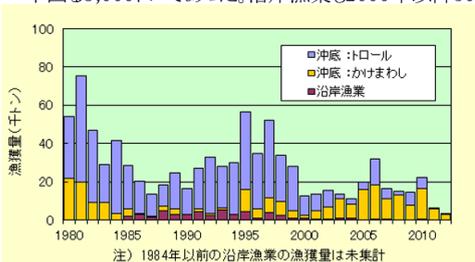


漁業の特徴

宗谷海峡周辺に分布するイカナゴ類にはイカナゴとキタイカナゴの2種が含まれているが、漁獲物に占めるキタイカナゴの混入率は近年減少傾向にある。漁獲統計上ではこれら2種は区別されていない。漁獲物のほとんどは、沖合底びき網(トロールおよびかけまわし、以下沖底)によって漁獲され、沖底は6~9月に1~6歳魚を漁獲し、沿岸漁業は4~7月に0~3歳魚を漁獲している。

漁獲の動向

沖底の漁獲量は、1982年以降減少し、1987年には1.2万トンに落ち込んだが、その後増加し、1995年には5.2万トンに回復した。2000年以降は再び減少に転じ、約1.0万~2.0万トンの低い水準で推移した。2012年の漁獲量は前年を下回る3,000トンであった。沿岸漁業も2000年以降50~1,200トンの低い水準で推移し、2012年は166トンであった。

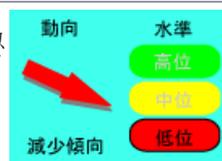


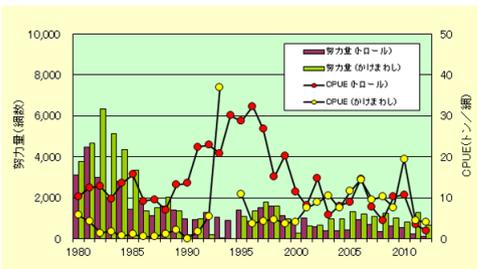
資源評価法

2004年以降資源管理措置がとられたため、沖底の漁獲量は資源水準を反映していない。そのため、努力量が比較的安定していた1986年以降のトロールのCPUEを用いて近年の資源水準・動向を評価し、2003年以降のかけまわしCPUEも判断の参考にした。ただし、資源が日本水域とロシア水域とにまたがって分布していること、漁業実態が変化しているため、CPUEによる長期的な資源水準の比較には不確実性が高い。

資源状態

トロールのCPUEは1990年代に入ると増加傾向を示し、1996年には1980年以降最高の32.3トン/網に達した。2000年以降は減少傾向に転じ、2012年は2.0トン/網と1980年以降の最低値となった。1986~2011年のCPUEの平均を50とすると、2012年の水準指数は7であった。以上のことから、資源水準は低位と判断し、近年5か年の沖底CPUEの変化から動向は減少と判断した。漁獲物の年齢組成から、2009~2011年級群は連続して加入が少ないと考えられ、2012年級群の加入も不良であった場合、今後の資源全体の豊度はさらに大きく減少する可能性がある。





管理方策

イカナゴ類の資源水準が中～低位に留まっているのは、豊度の高い年級群が加入していないことが要因と考えられる。2009～2011年級群の加入状況は連続して悪いと推測されている。そのような状況の下、稚内根拠地船のトロール船は2004年に2隻、2011年に1隻減船となったが、トロールとかけまわしを合わせた沖底の網数は2011年まで大きく減少していない。現状の漁獲努力を継続して、環境変動等により加入状況が悪化した場合、漁獲圧の上昇によって、資源がさらに減少する可能性がある。資源の回復を推進するため、加入状況に応じて若齢魚に対する漁獲圧を抑えるとともに、産卵親魚量を維持する必要がある。

資源評価のまとめ

- 漁業構造の変化があり、長期的な資源水準の評価は困難
- 1986年以降のトロールCPUEより、資源水準は低位、動向は減少
- 資源動向は、加入年級群の豊度により変動する

管理方策のまとめ

- 北海道は、2004年に宗谷海峡のイカナゴを資源回復計画の対象種に指定した(2011年一部改変)
- 2012年度以降は資源管理指針・計画の下、漁獲努力削減の取り組みが継続して実施されている
- 資源の回復を推進するため、加入状況に応じて若齢魚に対する漁獲圧を抑えるとともに、産卵親魚量を維持する必要がある

執筆者: 加賀敏樹・山下紀生

資源評価は毎年更新されます。